

令和7年度  
高等教育推進センター  
活動報告書（資料集）

## 目次

(1) ヨコハマ4大学FD・SD連絡協議会 2025 開催報告	1
(2) 令和7年度FD関連講演会等実績	2
(3) 令和7年度教学IR実施報告書	7
(4) 令和7年度高大連携実績	21

## 【開催報告】ヨコハマFD・SD連絡協議会 2025

日時：令和7年12月13日（土）14:00～17:35

場所：横浜国立大学 常盤台キャンパス

参加者数：46名（神奈川 11名、関学 12名、横国 12名、横浜市 11名）

各大学の参加者の内訳：

大学名	教員	職員	学生	合計
神奈川大学	3	6	2	11
関東学院大学	6	4	2	12
横浜国立大学	5	3	4	12
横浜市立大学	4	5	2	11

### 1. テーマ

初年次教育について考える—大学での学びのスタートを支える仕組みとは—

### 2. 概要

令和7年12月13日（土）に、横浜国立大学常盤台キャンパスにて「ヨコハマFD・SD連絡協議会 2025」を開催いたしました。

本協議会は、FD・SD活動について連携する包括協定を締結している4大学（神奈川大学、関東学院大学、横浜国立大学及び本学）が、その連携の一環として年に1度開催しています。

### 3. 内容

#### (1) 各大学からの報告

4大学における初年次教育の取組について、目的、実施形態、教育内容、成果や課題など、現状の取組を中心に報告されました。

#### (2) グループディスカッション

「初年次教育はどうあるべきか、どう実施すべきか」という課題について、参加者が5つのテーマに分かれて議論しました（※は教職員のためのテーマ）。4大学で共通した課題として、学部共通の初年次教育の導入へのハードルの高さ、成績評価のばらつきなどが挙げられました。

テーマ	学生の声	各大学の取り組みや意見
初年次教育で育成すべき能力について	・大学の授業では「分かったつもり」になりやすく、知識が定着しにくいと感じている。	・初年次教育の目的として、「なぜ学ぶのか」の理解、居場所づくり、教員との出会い、基礎スキルの習得を重視している。

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主体的な学び方（復習・演習の仕方）を初年次から身につけたかった。</li> <li>・プレゼンテーション能力など、入学時点での学生間の差が大きいと感じている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全学共通の取り組みに加え、学部・学科単位での初年次教育も必要であるとの認識が共有された。</li> <li>・倫理教育などについては、知識の反復ではなく、「考え、他者に伝える力」を育成することが重要であるとされた。</li> </ul>
高校から大学への学びの橋渡しをどう設計するか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・履修登録や学内システムへの適応が想像以上に大変。</li> <li>・相談相手（友人・教職員）がいないと大学生活が孤立しやすい。</li> <li>・シラバスの見方が分からず、履修相談を先輩に頼ることが多い。</li> <li>・対面窓口よりチャット等の方が相談しやすい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新入生オリエンテーションや大学生協の企画が、高校から大学への移行支援として有効に機能している。</li> <li>・コンタクト教員制度や学生支援窓口の設置により、早期相談体制を整備している。</li> <li>・年内入試の増加に対応し、早期オリエンテーションや学生支援部署を新設している大学がある。</li> <li>・学部オリエンテーションに全教員が参加するなど、組織的な関与を強化している。</li> </ul>
全学共通プログラムと学部独自プログラムの役割分担	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教養科目について、「学びたいから履修する」のか「単位取得を優先する」のかで迷いが生じている。</li> <li>・文系と理系で必要なスキルが異なるため、内容を一律にすることに違和感を覚える。</li> <li>・初年次に限らず、上級年次にもグループワークの機会があるとよい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全学共通プログラムは、市民としての教養修得やコミュニティ形成を担うものとして位置づけられている。</li> <li>・専門教育への導入科目とは明確に区別する必要があるという認識が示された。</li> <li>・評価基準が教員ごとに異なり、成績評価にばらつきが生じている点が課題となっている。</li> <li>・学部の独自性を尊重しながら、最低限の共通化を図る取り組みが行われている。</li> </ul>
初年次教育の手法と実施形態	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学直後は、対面授業を通じた友人づくりや居場所形成が重要であると考えられている。</li> </ul>	

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オンデマンド中心の授業形態では、学修意欲が低下しやすいという懸念が示された。一方で、オンデマンドは内容を均質に学べる手段として有効であると感じられている。</li> <li>・メールよりも、Teams 等のアプリの方が連絡に気づきやすい。</li> </ul>	
--	--	--

テーマ	各大学の取り組みや意見
初年次教育の評価とPDCA サイクル※	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ GPA、授業アンケート、外部アセスメントテスト等を用いた複合評価をおこなっている。</li> <li>・ 共通テキストや共通ルーブリックを整備しつつ、運営は学部裁量になっている。</li> <li>・ オンデマンド科目では確認テストを実施するなどして学習状況を把握している。</li> <li>・ 授業アンケートを学生の自己成長把握に主眼を置いたものに変更し、中間と期末期の2回実施した結果を次年度のシラバス改善に活用している。</li> <li>・ 学部へのフィードバックが、必ずしも改善につながっていない点が課題として挙げられた。</li> </ul>

FD関連講演会等実績（令和7年度実績）

	①国際総合科学群FD・SD研修会	②国際総合科学群FD・SD研修会	③国際総合科学群FD・SD研修会
日時	令和7年6月5日	令和7年6月13日	令和7年6月20日
形式	オンライン	オンライン	オンライン
参加人数	48名	27名	34名
講演テーマ	大学院教育における国の政策的動向と 将来の大学院を考える	学部長賞・共通教養賞講演①	学部長賞・共通教養賞講演②
講演者	高等教育推進センター 菊池 芳明 学務准教授	共通教養賞 坂口 利裕 教授 国際教養学部長賞 石川 永子 准教授	国際商学部長賞 根本 裕太郎 准教授 理学部長賞 鈴木 凌 助教 データサイエンス学部長賞 上田 雅夫 教授
	④国際総合科学群FD・SD研修会（FD・SD推進委員会主催）	⑤教学IRと連動したFD	⑥研究推進部主催J-PEAKSセミナー
日時	令和7年8月4日	令和7年9月4日	令和7年9月11日
形式	対面	オンライン	対面（オンライン併用）
参加人数	25名	40名	52名
講演テーマ	第1回学生参画型FD・SD研修会 ”面白い”授業の基準はどこにある？ —多様な学生と教員の双方にとって理想的な授業とは—	内部質保証と教学IR —第4期認証評価に向けて—	自然言語処理技術による医療現場の課題解決 ～電子カルテデータ×自然言語処理による 質の高い研究創出へ～
講演者	—	高等教育推進センター 菊池 芳明 学務准教授	奈良先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科教授 荒牧 英治
	⑦高等教育推進センター主催	⑧初年次教育FD	⑨国際総合科学群FD・SD研修会
日時	令和7年9月12日	令和7年11月6日	令和7年12月3日～
形式	オンライン	オンライン	録画配信
参加人数	91名	27名	46名
講演テーマ	第4期大学機関別認証評価受審に向けて	学生に共通体験を与える初年次教育	シラバス記載の原則と実践
講演者	—	大阪公立大学国際機関教育機構 准教授 深野 政之	高等教育推進センター 菊池 芳明 学務准教授、 FD・SD推進委員会事務局
	⑩ヨコハマ4大学FD・SD連絡協議会	⑪教学IRと連動したFD	⑫国際総合科学群FD・SD研修会
日時	令和7年12月14日	令和8年1月21日・28日	令和8年1月23日
形式	対面（横浜国立大学 常盤台キャンパス）	オンライン（Zoom）	オンライン
参加人数	46名	第1回 26名、第2回 28名	15名
講演テーマ	初年次教育について考える —大学での学びのスタートを支える仕組みとは—	内部質保証と教学IR：初級編 第1回 内部質保証とは何か、なぜ必要なのか 第2回 学修成果を可視化するとはどういうことか&事例	異分野横断型教育プログラムによる博士人材育成 —熊本大学の10年余の取組と実績—
講演者	横浜市立大学・神奈川大学・関東学院大学・横浜国立大学 担当教職員および学生	高等教育推進センター 菊池 芳明 学務准教授	熊本大学 大学教育統括管理運営機構 梅田 香穂子
	⑬国際総合科学群FD・SD研修会	⑭国際総合科学群FD・SD研修会（理学部主催）	⑮国際総合科学群FD・SD研修会（データサイエンス学部主催）
日時	令和8年1月29日	令和8年2月6日	令和8年2月19日
形式	オンライン	対面・オンライン併用	オンライン
参加人数	20名	56名	28名
講演テーマ	サバティカル終了後報告	青少年の性的問題行動に関する理解と対応	PBL事例紹介
講演者	国際教養学部 土屋 慶子 教授	よこはま法務少年支援センター（横浜少年鑑別所） 地域非行防止調整官	国際教養学部 石川 永子 准教授、鈴木 伸治 教授
	⑯国際総合科学群FD・SD研修会（FD・SD推進委員会主催）	⑰情報科目FD・SD研修会	⑱教養ゼミFD・SD研修会
日時	令和8年3月9日	令和8年3月17日	令和8年3月23日
形式	オンライン	オンライン	対面・オンラインのハイブリッド開催
参加人数	20名	17名	55名
講演テーマ	第2回学生参画FD・SD研修会 未来の授業をアップデート！学生と教員のトークセッション —対話から生まれる授業改善のヒント—	令和7年度の情報科目運営の振り返りと令和8年度の初年次情報科目運営について	第2回共通教養FD（教養ゼミFD） 教養ゼミの効率的運営と期待される教育効果
講演者	—	吉田 栄一 共通教養長、 金 亜伊 情報教育委員会委員長	吉田 栄一 共通教養長、学術情報課担当者、 土屋 隆裕 教授

国際総合科学群

	①医学科FD	②海外実習報告会	③医学国際セミナー/医学会講演会FD
日 時	令和7年5月28日～8月31日	令和7年5月28日	令和7年6月20日
形 式	録画配信	対面開催/録画配信	対面・録画配信
参加人数	24名	(対面開催) 60名/ (録画配信) 45名	(対面開催) 6名/ (録画配信) 12名
講演テーマ	医学科カリキュラムについて (2025年度版)	海外実習報告会	IDH mutant glioma development - 自身のキャリア・ディベロップメントも含めて -
講演者	横浜市立大学 医学教育学 教授 稲森正彦	令和7年3月に海外臨床研修に参加した医学科6年生14名	マサチューセッツ総合病院 Professor Daniel P. Cahill
	④医学国際セミナー/医学会講演会FD	⑤医学国際セミナー/医学会講演会FD	⑥医学科・看護学科合同FD
日 時	令和7年7月7日	令和7年7月18日	令和7年8月8日
形 式	対面	対面	オンライン・録画配信
参加人数	5名	24名	(オンライン) 37名/ (録画配信) 4名
講演テーマ	横浜市大から世界へ その道は一つではない	創造的開発人材を育て国産医療機器を創る ～医工融合型新専攻・新学部を設置～	患者からみる医学教育・看護学教育
講演者	ロズウェルパークがんセンター 乳腺外科主任教授 高部和明	神戸大学大学院医学研究科 教授 村垣善浩	認定NPO法人ささえあい医療人権センターCOML 理事長 山口育子
	⑦海外実習報告会	⑧医学科FD	⑨医学教育推進部門FD
日 時	令和7年9月3日	令和7年12月2日～12月4日	令和7年12月19日～1月20日
形 式	対面開催/録画配信	対面・オンライン	録画配信
参加人数	(対面開催) 40名/ (録画配信) 28名	(対面) 26名/ (オンライン) 14名	111名
講演テーマ	海外実習報告会	NUS Week in YCU (シンガポール国立大学との国際学術交流イベント)	①「ベストティーチャー賞に授業の秘訣をきいてみました」 ②「障害学生支援について」 ③「患者からみる医学教育・看護学教育」
講演者	2025年度に医学科海外研究実習に参加した医学科4年生4名、 2024年度にNUSシミュレーショントレーニングプログラムに 参加した医学科6年生6名	シンガポール国立大学 医学部長 Prof.Chong Yap Seng 副学長(研究担当) Prof.Chng Wee Joo 学長補佐(教育担当) Associate Prof. Alfred Kow Wei Chieh ンテンフオン病院・シユロンコミュニティ病院 病院長 Associate Prof. Dan Yock Young 他本学より26名	①横浜市立大学 組織学教室 富澤信一/消化器内科学教室 岩 田悠里 ②横浜市立大学保健管理センター 小田原 俊成 ③認定NPO法人ささえあい医療人権センターCOML (コムル) 理事長 山口 育子
	⑩看護学科FD		
日 時	令和7年12月23日		
形 式	対面・オンラインのハイブリッド		
参加人数	58名		
講演テーマ	“患者さん”から学ぶ看護教育のあり方 ～「患者さんに育ててもらった」経験はありますか？学生と 教職員で一緒に振り返りましょう！～		
講演者	-		

医学科・看護学科

# 令和7年度 国際総合科学群教学 IR 実施報告書

## 1 国際総合科学群教学 IR 検討ワーキング開催実績

- 第1回 令和7年6月9日
- 第2回 令和7年9月16日
- 第3回 令和7年12月25日
- 第4回 令和8年3月13日

## 2 国際総合科学群教学 IR 検討ワーキングメンバー（敬称略）

ワーキング長	土屋 隆裕
ワーキング長補佐	橘 勝
国際教養学部	大島 誠、小野寺 淳、江上 園子
国際商学部	和田 淳一郎、白石 小百合、橋本 倫明
理学部	佐藤 友美、大関 泰裕、北 幸海
データサイエンス学部	土屋 隆裕、大西 暁生
事務局	森谷学務・教務部長、佐藤教育推進課長、大磯学術企画担当係長、毛利学術企画担当、梶原学術企画担当

## 令和7年度 国際総合科学群教学 IR 検討ワーキング分析結果

### 1 入学から卒業後までのアンケートをつないだ経時的な分析

#### <取組概要>

平成30年度より「新入生アンケート（入学時実施）」、「カリキュラム評価アンケート（卒業時実施）」、「卒業生アンケート（卒後3年に実施）」の3つのアンケートに、本学の教育ポリシーに関する共通の設問※を設定し、回答結果の分析を行った。分析結果は各種会議で報告を行い、カリキュラム改善の検討を支援した。

また、分析を開始した平成30年度～令和3年度の入学者がすでに卒業しているため、新入生アンケート、カリキュラム評価アンケートの対象者を揃えたクロス集計を行い、経年での変化を分析した。

※「課題発見・問題解決力」「グローバルな視野」「豊かな教養」「確かな専門性」

#### (分析内容)

- (1) 各アンケートをつないだ経時分析（令和7年度実施の調査結果から分析）
- (2) 平成30年度～令和3年度入学者の入学時、卒業時アンケートの比較分析

#### <分析結果>

- (1) 過年度の分析結果含め、入学時には期待値が高いものの、卒業時の成長した実感と卒後3年時の役立っている実感は、徐々に下がっていく傾向が見られている。中でも「グローバルな視野」については、入学時の期待に比べて卒業時・卒後3年時の結果が大きく下がる傾向にある。

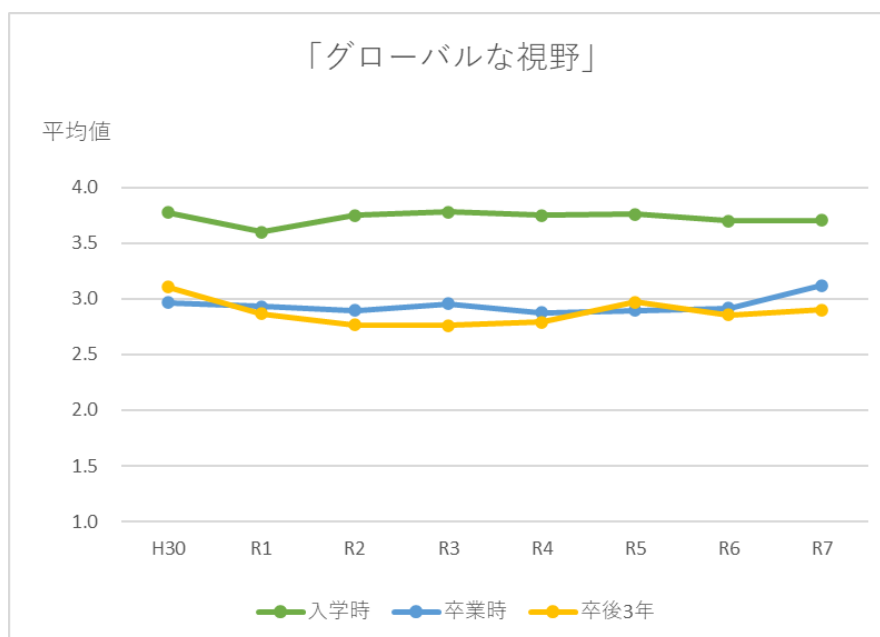


図1) 「グローバルな視野」の経年比較

- (2) 平成 30 年度～令和 3 年度の入学者において、入学時と卒業時の回答をつないだ分析を行ったが、(1)での経時的な分析と同様の結果が得られた。

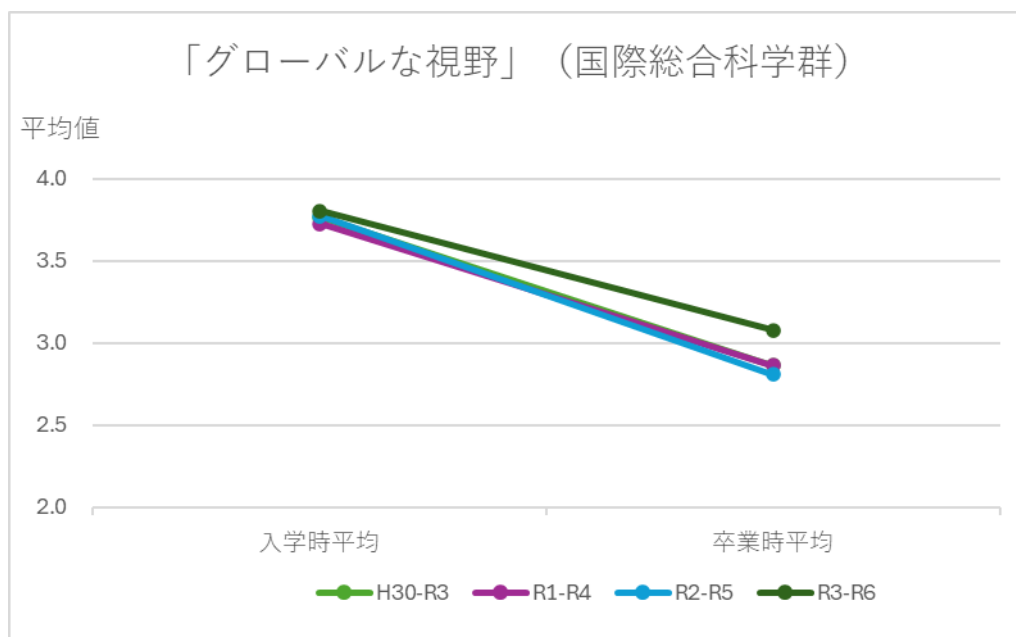


図 2) 同一対象をつないだ「グローバルな視野」の入学時・卒業時比較

## 2 教学 IR 検討 WG における認証評価に向けた対応

**<取組概要>** 教育の質の保証を行うために、特に重要項目と考える 3 つの観点について、検討を進めた。教学 IR 検討 WG にて分析した結果を各学部会議で報告・共有し、学部独自の課題の洗い出し、改善に向けた検討が進められた。

<教学 IR 検討 WG で取り組む 3 つの観点>

- (1) 「各授業の内容が授与する学位に相応しい水準となっていること」
- (2) 「成績評価や単位認定が厳格かつ客観的に行われていることの組織的確認」
- (3) 学修成果の可視化

### (分析内容)

- (1) 授業外学修時間の推移  
 ※授業改善アンケートにおける授業外学修時間の設問について、以下 6 段階の回答割合を集計分析  
 ⑥ 4 時間以上、⑤ 3 時間以上 4 時間未満、④ 2 時間以上 3 時間未満、  
 ③ 1 時間以上 2 時間未満、② 1 時間未満、① ほとんどしなかった
- (2) 令和 7 年度科目における成績評価に関する分析
- (3) 【YCU-Board ポートフォリオ機能】 YCU 指標を用いた試行的な分析

## <分析結果>

- (1) 大学設置基準の単位に関する条文「1単位の授業科目を45時間の学習を必要とする内容をもって構成すること」を踏まえ、正規の授業時間に加えて、学生の授業外学修時間数の確認を行った。

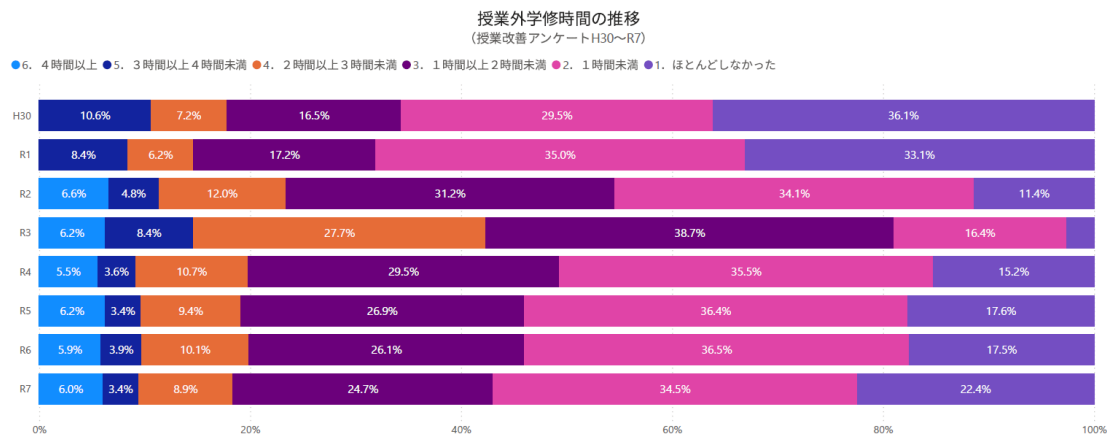


図3) 授業外学修時間の推移

令和元年度から令和2年度にかけて、「③1時間以上2時間未満」の回答割合が大きく増えていることで、授業外学修時間全体が増えており、令和7年度についても令和2年度と同様の傾向であった。しかし、令和2年度をピークに徐々に減少傾向ではあり、「②1時間未満」、「①ほとんどしなかった」の回答割合が増えていることが確認できた。(令和2年度比13.9%増)

(2) 令和7年度の成績評価結果を分析し、成績評価が適切に行われているか確認を行った。

- ・分野別に GPA 平均値を集計し、GPA 平均値が高すぎるまたは低すぎる分野・科目の確認を各学部で行った。
- ・成績登録者数によって平均値に差が見られることから、成績登録者数と GPA 平均値を散布図にまとめ、評価が偏っている科目の確認を各学部で行った。
- ・各学期の集計結果だけでなく、経年変化の集計を詳細に行い、継続して成績評価が適切に実施できているか確認できるようにした。

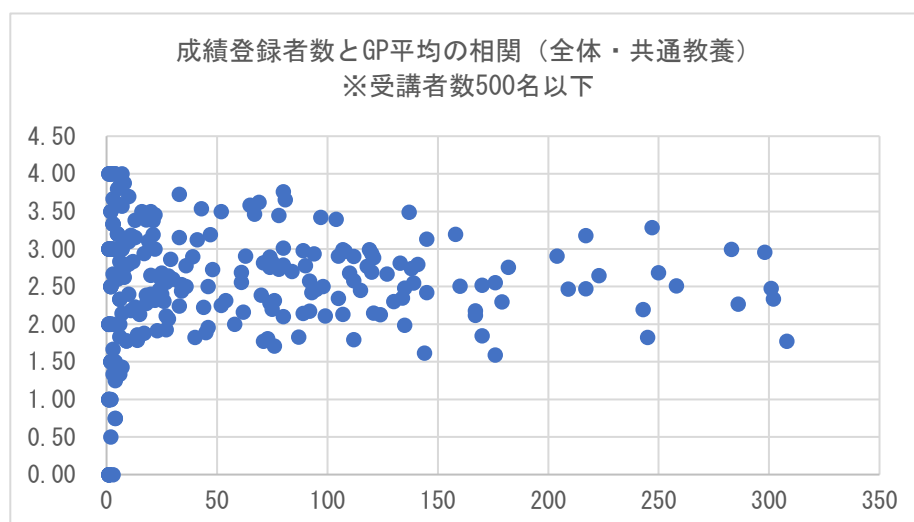


図4) 成績登録者数と GP 平均相関 (共通教養科目)

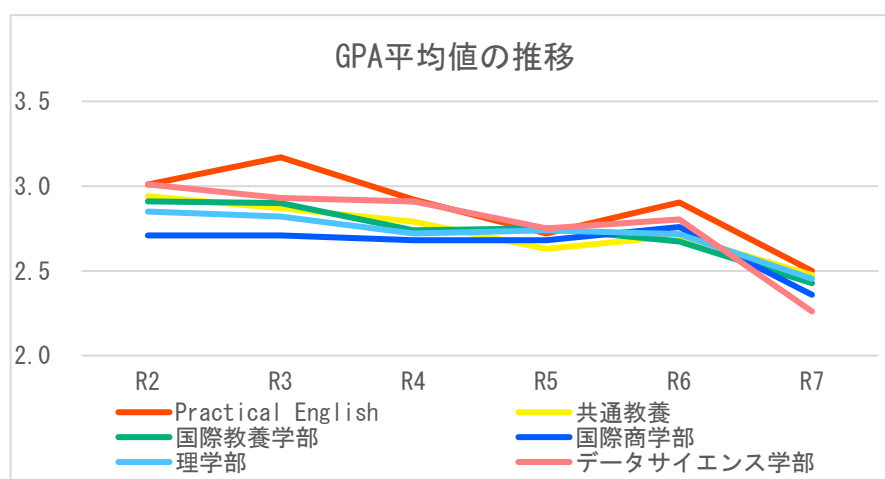


図5) GP 平均値 (各学部・共通教養・Practical English)

(3) 令和4年度から導入した LMS (YCU-Board) ポートフォリオ機能「YCU 指標※」を用いた学修成果の分析について、以下2つの分析を昨年度から継続して試行的に実施した。

※本学の学修を通して備えるべき6つの学修成果項目「論理的思考」「情報リテラシー」「国際的視野」「資料作成力、プレゼンテーション」「地域貢献」

「各学部独自項目」

### (分析内容)

a 入試区分と YCU 指標（学修成果）の相関分析

b 留学経験と YCU 指標（学修成果）の相関分析

a、b ともに令和 6 年度 4 年次生の学修成果との掛け合わせを行い分析した。a では、推薦型選抜の学生（「論理的思考」を除く）、b では留学経験が有る学生の学修成果が高い傾向にあり、今後は学部毎の経年や該当区分の学生の志向・特徴の分析を進めていく。

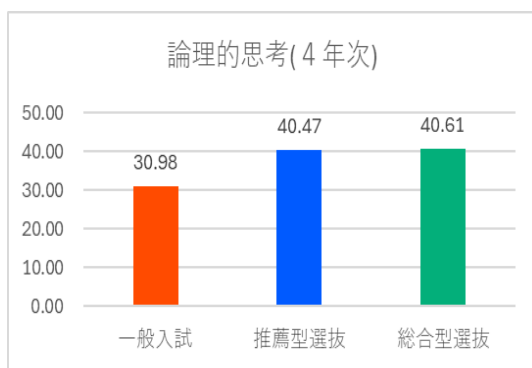


図 6) 入試区分による YCU 指標への影響

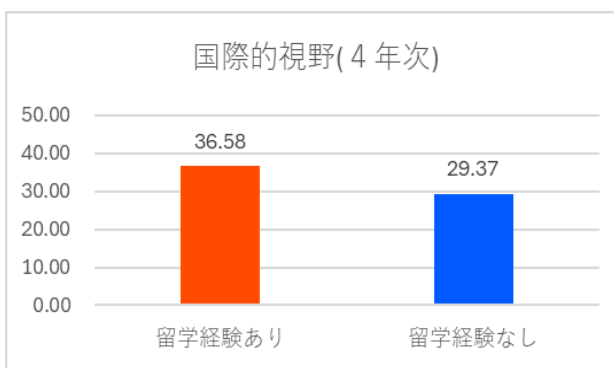


図 7) 留学経験による YCU 指標への影響

## 3 全国学生調査の実施及び分析

### <取組概要>

全国学生調査は令和元年度から令和 6 年度までの計 4 回、試行で実施されており、令和 7 年度から本格的実施となった。令和 7 年度は当該年度調査の設計と実施、また本学の調査結果の集計を行った。調査の設計にあたっては、「教学 IR 学生プロジェクト」を発足し、学生視点での調査結果の報告会を実施した。

なお、本学の調査結果と全国の大学との比較分析については、令和 8 年度に文部科学省から調査結果の公表が出次第着手する予定である。

### (取組内容)

- (1) 令和 7 年度全国学生調査の本学結果の集計
- (2) 「教学 IR 学生プロジェクト」による分析と報告

### <分析結果>

- (1) 前回調査の分析結果により、全学的な課題として取り上げた項目について、本学の推移を確認した結果、ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導、インターンシップの満足度について改善が確認できた。以下は、「有用だった」を 4 点、「ある程度有用だった」を 3 点、「あまり有用ではなかった」を 2 点、「有用ではなかった」を 1 点として算出した本学回答の平均値を示している。

- ・「課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される」

令和 7 年度：2.50、令和 6 年度：2.53、令和 4 年度：2.52

- ・「ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導がある」

令和7年度：2.54、令和6年度：2.46、令和4年度：2.44

・「インターンシップ（5日間以上）」（満足度）

令和7年度：3.38、令和6年度：3.36、令和4年度：3.05

(2) 以下の3つについて教学IR学生プロジェクトによる分析を行った。

ア 本学と全国の比較

イ 成長の実感にかかわる能力

ウ 本学の学生における精神状態の分析

ア 本学と全国の比較

本学の強みと弱みの把握を目的として、令和6年度全国学生調査の問1・問2・問3・問4の回答を点数化し、本学と全国の比較を行った。点数化にあたっては、問2の「経験していない」という回答は平均値を求める際に除外した。

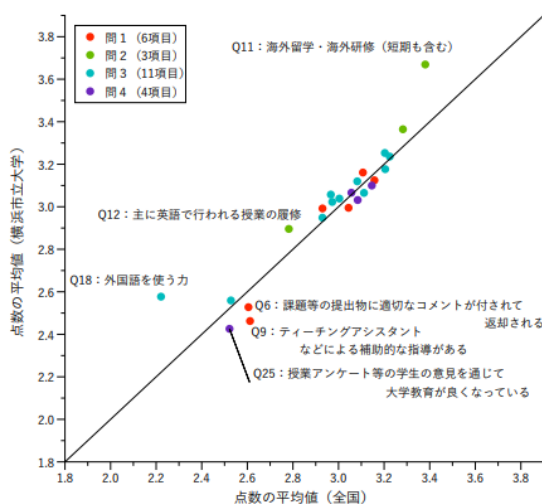


図8) 点数の平均値の比較（本学全体と全国）

分析の結果、本学の強みとして挙げられる上位3項目は「外国語を使う力」「海外留学・海外研修」「主に英語で行われる授業の履修」、弱みとして挙げられる上位3項目は「ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導がある」「授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている」「課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される」であることを確認できた。

イ 成長の実感にかかわる能力

どのような知識や能力を身に付ければ大学教育による成長を実感できるのか、さらに、そのような知識や能力を身につけるにはどのような授業を行えばよいのかを探ることを目的として、令和7年度全国学生調査の本学回答データを使用し分析を行った。

専門分野に関する知識・理解	.374	.486	.614	.527	.355	.410
将来の仕事につながるような知識・スキル・態度・価値観	.345	.471	.611	.451	.406	.349
文献・資料を収集・分析する力	.287	.400	.507	.314	.361	.462
論理的に文章を書く力	.309	.447	.481	.311	.368	.415
人に分かりやすく話す力	.260	.442	.513	.273	.349	.486
外国語を使う力	.255	.315	.433	.252	.381	.304
数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能	.268	.322	.458	.329	.322	.351
問題を見つけて解決方法を考える力	.357	.439	.569	.370	.344	.454
他者と協働する力	.296	.396	.598	.339	.364	.329
幅広い知識、ものの見方	.317	.449	.574	.387	.396	.411
異なる文化に関する知識・理解	.274	.415	.448	.319	.308	.441
	国際教養学部	国際商学部	理学部	DS学部	医学科	看護学科

図9) 知識・能力と成長の実感との連関係数(2年生)

専門分野に関する知識・理解	.379	.465	.439	.516	.439	.471
将来の仕事につながるような知識・スキル・態度・価値観	.428	.408	.318	.489	.558	.377
文献・資料を収集・分析する力	.383	.318	.388	.433	.545	.296
論理的に文章を書く力	.330	.391	.359	.500	.485	.381
人に分かりやすく話す力	.465	.376	.377	.523	.396	.315
外国語を使う力	.286	.317	.350	.352	.350	.240
数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能	.188	.333	.351	.449	.434	.352
問題を見つけて解決方法を考える力	.390	.435	.396	.554	.572	.355
他者と協働する力	.411	.325	.383	.502	.455	.490
幅広い知識、ものの見方	.380	.392	.404	.580	.533	.418
異なる文化に関する知識・理解	.360	.349	.332	.400	.439	.237
	国際教養学部	国際商学部	理学部	DS学部	医学科	看護学科

図10) 知識・能力と成長の実感との連関係数(卒業年次生)

図9と図10は、学年と学部別に、成長実感項目と知識・能力項目との間の関連の強さを求めた結果である。図中の数値はクramerの連関係数であり、値が1に近いほど成長実感項目との関連が強いことを示す。

学部によって違いはあるものの、概して「専門分野に関する知識・理解」「将来の仕事につながる知識・スキル・態度・価値観」「問題を見つけて解決方法を考える力」「幅広い知識、ものの見方」は成長の実感と強く関連している。一方で、「外国語を使う力」や「数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能」は必ずしも成長の実感とは強く関連していない。

#### ウ 本学の学生における精神状態の分析

令和6年度・令和7年度全国学生調査の本学独自設問の回答結果を用い、孤独感と精神的苦痛の間にどのような関係性があるのかを明らかにすることを目的として分析を行った。図11は孤独感指標、図12は精神的苦痛指標が令和6年度から令和7年度にかけてどう変化したかを示すグラフである。

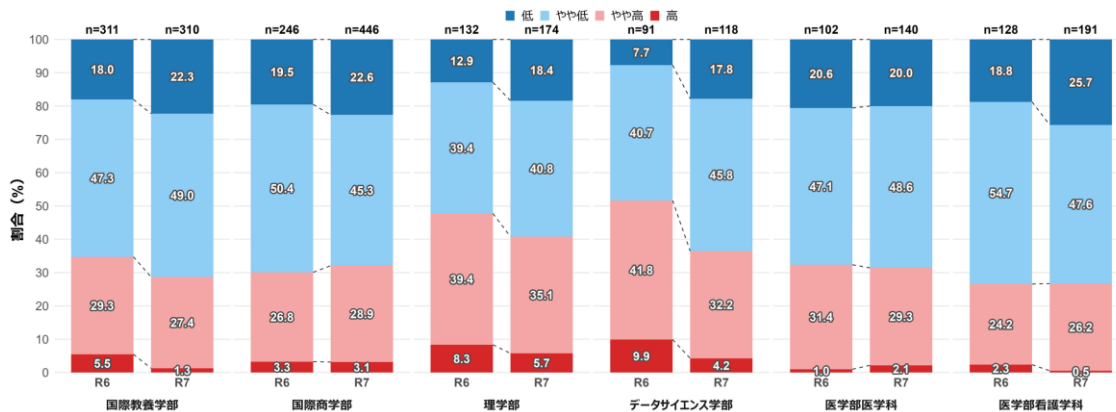


図 11) 孤独感指標 (年次・学部別)

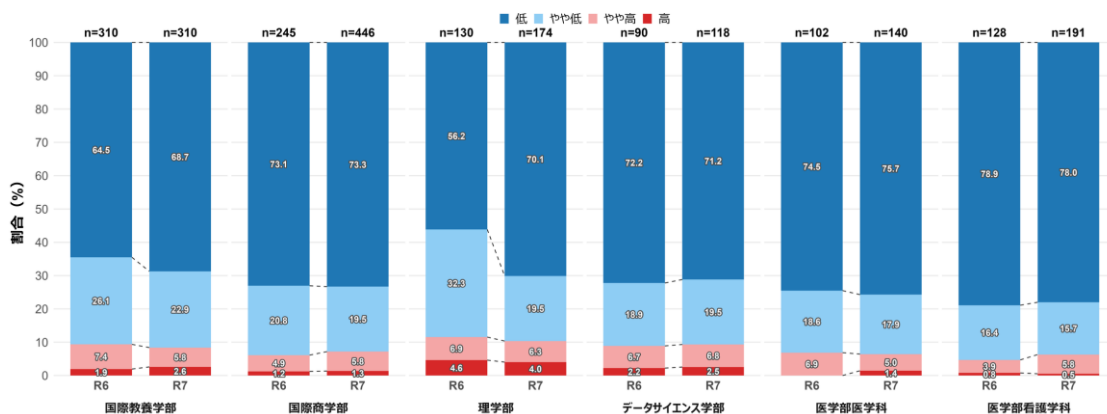


図 12) 精神的苦痛指標 (年次・学部別)

孤独感指標は、全体として令和6年度から令和7年度にかけて「低」が増加し、「高」が減少した。

精神的苦痛指標は、全体として令和6年度と令和7年度の分布差は大きくなく、令和7年度では「低」がやや増え、「やや低」が減少したが、「やや高」および「高」の割合はおおむね横ばいであった。学部別にみると増減が混在しているが、変化幅は小さく、年度間で明確な一方向の変化があるとはいえない状況であった。

孤独感と精神的苦痛の間には一方が高まると他方も高まるといった一貫した関係性は認められず、両者の間に明確な関連があるとはいえないことが明らかとなった。

#### 4 分析結果の報告

各分析結果について各種会議にて報告・共有し、各学部におけるカリキュラム等の検証や改善を支援した。

<報告・共有した会議体>

- ・学長諮問会議 (年1回)

- ・高等教育推進センター教学 IR 部門会議(年 3 回)
- ・各学部教授会(適宜)
- ・ICT 推進委員会(年 2 回 ※データ活用推進部会として報告)

## 5 今後の課題

### (1) 各学部研究科の自己点検評価・認証評価の支援のための教学 IR の推進

第 4 期大学機関別認証評価に向け、中央教育審議会大学分科会質保証システム部会「新たな時代を見据えた質保証システムの改善・充実について」の審議の結果、令和 6 年 4 月に認証評価に関する省令が改正され、「学修成果の把握と評価」という項目が大学評価基準に追加され、本学においても組織的な取り組みの実施と自己点検評価が必要となる。

また、令和 7 年 2 月に出された中央教育審議会「我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～(答申)」においては、今後の認証評価において、従来の機関別評価(大学の教育研究等の総合的な状況)ではなく、学部・研究科別の評価とすること、また、学生が在学中にどれくらい力を伸ばすことができたのか等を含む、教育の質を数段階で評価する新たな認証評価制度への移行という方向性が示されている。今後、各学部・研究科ではそれぞれの 3 ポリシーに基づいた教育の質保証が求められることとなる。

今年度の教学 IR 検討ワーキングでは、「学修成果の把握と評価」に関する取組の強化に加え、今後、学部・研究科での 3 ポリシーの点検に必要なデータ提供を行うための評価指標を検討するなど、モニタリング&レビュー設計の支援を行う。

### (2) 学内収集データの把握、取得データの整理について

本学で実施しているアンケートは業務の必要性に基づいて各部署で実施されており、学生から取得しているデータの全体像が十分に把握されていない。また、取得データの活用という点でも、各部署での管理下におかれているため、横断的な分析や検討が進まない状況となっている。そのため、各部署が実施するアンケートや保持している情報の把握を進め、ダッシュボードの形式で相互に閲覧・活用できるよう整理を図る。

令和7年度 医学群  
教学 I R 実施報告書

## はじめに

令和7年度につきましても、医療者の教育に欠かせない実習を中心に従来の教育が再開しています。また、Web会議システム等を使用した遠隔での授業運用にあっても、ICT技術を利用した、様々な工夫が凝らされるようになりました。教職員、学生のICTスキルが急激に上昇し、その利点を生かした学修が行われております。

横浜市立大学医学部医学科においては、JACMEによる分野別認証評価を2016年5月に受審し、2018年4月から2024年3月までの期間で認証を受けており、二巡目の受審を2023年秋に受審しました。受審結果は7年間の延長認定となりましたが、受審のなかで教学IR体制のさらなる整備とその体制を利用した継続的な医学教育プログラムの改良の仕組みの構築についての指摘がありました。これまでの医学科の改善状況の詳細については、毎年JACMEへの報告を行い、その内容は本学ホームページ上で年次報告書として公開されています。そこでの記載に加え、2019年から全学的な取り組みのもと、医学科と看護学科を合わせて、この報告書を作成し、公開する体制が整備されていることを幸甚に存じます。

なお医学群に所属する学生数は、医学科定員90～93名/学年、看護学科定員100名/学年と少なく、個人が特定されやすい状況を踏まえて、情報の一部について概要のみの公開となることをご容赦頂ければと考えております。

医学群教学IR検討ワーキング長  
藤田 浩司

1. 成績評価の分析（医学科・看護学科）

<取組概要>

- 1 成績評価を集計し、講義、実習、演習の授業形態別の成績評価の傾向から現状の成績評価は「厳格かつ客観的に実施されているか」を確認した

2. 授業外学修時間の分析（医学科・看護学科）

<取組概要>

- 1 授業評価アンケート結果を用いて授業外学修時間が十分に確保できているかを確認した
- 2 学修時間を確保するための対策について意見交換した

## 1. 成績評価の分析（医学科・看護学科）

### （1）実施内容

- 1 成績評価を授業形態別に整理し、厳格かつ客観的に実施されているかを確認

### （2）解析及び検討状況

- 1 成績評価を授業形態別に整理し、厳格かつ客観的に実施されているかを確認 現状の成績評価は「厳格かつ客観的に実施されている」といえるかを確認するためにまず令和 5 年度科目の成績情報を定めた条件に基づいて集計した。成績情報は「秀」、「優」、「良」、「可」、「不合格」という評価と、それを点数化する GP（グレードポイント）を用いて科目群、授業形態の二つに分けて検討した。科目群についてみると、医学科、看護学科共に基礎科目と臨床科目に若干の差があるものの、概ね昨年度同様に推移していた。授業形態別で確認したところ、「講義」「演習」「実習」のそれぞれで成績評価の傾向が異なる結果となり、講義と実習を比較すると、実習の方が「秀」「優」の割合が多くなる傾向が医学科、看護学科で同様に見られたが、昨年度と同様の傾向であった。また GP を用いた解析においても同様の傾向であった。これらの結果から医学部では科目群や授業形態によって特徴はあるものの概ね適切に成績評価が実施されていると判断した。

### （3）分析結果の報告

上記の分析結果について、以下の各種会議にて報告を行うとともに、結果を各学部教授会で報告・共有し、各学部におけるカリキュラム改善を支援した。

- 医学群 IR ワーキング
- 医学科教授会・医学部合同運営会議

### （4）添付資料

- ・ なし（本概要のみ公開）

## 2. 授業外学修時間の分析（医学科・看護学科）

### （1）実施内容

- 1 授業外学修時間が十分に確保できているかを確認
- 2 学修時間を確保するための対策について意見交換

### （2）解析及び検討状況

- 1 授業外学修時間が十分に確保できているかを確認

令和6年度の授業評価アンケートの結果をもとに、学生の授業外における学修時間の状況を把握し、大学設置基準や学部の通則に沿った授業外学修時間の確保を目標に対策を検討した。1単位の授業科目の場合、45時間の学修時間が必要だが、授業時間で補えない学修時間は授業外で行うことが必要となることを前提として確認した。医学科は、1日の講義に対する予習・復習の時間は、最も多いのが30分で講義形式なら36.7%、実習形式なら40.3%であった。一方、2時間以上の時間を確保している学生は約3.2%であった。看護学科は、授業時間以外の1週間に行う該当科目の学修時間は、1時間未満で約37.8%、2時間未満が約23.7%で、2時間以上確保している学生は約17.2%であった。この結果から医学科、看護学科ともに十分な学修時間が確保できていないことを確認した。なお、解析に用いた授業評価アンケートは回答率が低く、データの信憑性が乏しいのではないかと意見があり、正確な検討のためのデータ収集が課題となった。

## 2 学修時間を確保するための対策について意見交換

学修時間の確保には予習や復習の機会を創出することが一つ意見として挙げられた。学修時間の確保が目的ではなく、授業における理解の促進やディスカッションを活発に行うという観点を持つ必要があると提示された。医学科、看護学科ともに学年が進行すると、模擬試験や国家試験を見据えて学修時間が徐々に増えていくが、そういった学修できる環境の整備が必要であると意見が出された。その他に学習意欲を向上させる取り組みの必要性が提示された。

### (3) 分析結果の報告

上記の分析結果について、下記の各種会議にて報告を行うとともに、結果を医学部教授会で報告・共有し、医学部におけるカリキュラム改善を支援した。

○医学群 IR 検討ワーキング

○医学科教授会、医学部・医学研究科合同運営会議

### (4) 添付資料

- ・ なし（本概要のみ公開）

## 2-19 高大連携の実施状況

年度	区分	校数	対象校
R7	出張講義	【県立】 6校 【市立】 5校 【私立】 3校	【県立】 市ヶ尾（2回）、川和（2回）、横浜平沼、平塚江南、横浜緑ヶ丘（2回）、茅ヶ崎北陵 【市立】 横浜サイエンスフロンティア（2回）、金沢、横浜商業、南、桜丘（2回） 【私立】 横浜女学院中学校・高校、逗子開成、田園調布学園
	講義体験	【県立】 0校 【市立】 1校 【私立】 5校	【県立】 【市立】 金沢 【私立】 鎌倉女学院、フェリス女学院、関東学院六浦、湘南白百合学園、清泉女学院
R6	出張講義	【県立】 6校 【市立】 4校 【私立】 2校 【その他】 2校	【県立】 市ヶ尾（2回）、川和（2回）、横浜平沼、平塚中等教育、横浜緑ヶ丘（3回）、茅ヶ崎北陵 【市立】 横浜サイエンスフロンティア（2回）、金沢高校、横浜商業高校、南高校 【私立】 逗子開成、田園調布学園 【その他】 静岡東、並木中等教育
	講義体験	【県立】 4校 【市立】 3校 【私立】 3校	【県立】 横須賀大津高校、金沢総合高校、横浜平沼高校、上溝南高校 【市立】 金沢高校、横浜商業高校、横浜サイエンスフロンティア高校 【私立】 鎌倉女学院高校、フェリス女学院高校、山手学院高校
R5	出張講義	【県立】 4校 【市立】 4校 【私立】 2校 【その他】 1校	【県立】 川和（2回）、大和（2回）、希望ヶ丘、 横浜緑ヶ丘（2回） 【市立】 金沢、横浜商業、横浜サイエンスフロンティア（2回）、南 【私立】 鎌倉女学院、田園調布学園 【その他】 静岡東
	講義体験	【県立】 1校 【市立】 2校	【県立】 横須賀大津高校 【市立】 金沢高校、横浜商業高校